

春野恵子氏に聞く――

私と浪曲

―いま大阪から伝えたいこと―

一目惚れ

29歳のとき、私は自分の生き方にすごく悩んでいました。すでに東京でテレビのバラエティー番組などに出演してそれなりに知名度はありましたが、それは自分の芸に対する人気とは違うものでした。「日々修業し、実力を積み重ねていく実感を持ちながら生きていきたい」。そんな思いを強くしていたある日、たまたま落語を聞きにいった木馬亭(浅草)で、初めて浪曲と出会いました。「自分が一生かけて追求するのはこれだ」ってね。幼い頃から時代劇やミュージカルが好きだったからというのは、後付けの話。思い込みの激しい私は、とくに根拠なく「これだ」って直感しました。そして2003年の夏、私は二代目春野百合子に弟子入りしました。じつは師匠のもとで勉強しだしてから、浪曲の面白さや格好良さがどんどんわかってきたんです。だから直感で浪曲師になっても、一度も後悔したことはありません。今では浪曲があるからこそ生きていけるんだと思えるほどです。

大阪の空気

東京生まれ育ちの私が大阪で浪曲師になろうと思ったのは、春野百合子という人が大阪にいたからにはほかなりません。もし師匠が北海道にいたら、私も北海道に行っていたでしょう。何度聞いてもぐいぐい引き込まれる、それが春野百合子の浪曲。舞台を見ると、お客様がだんだん前のめりになっていく感じが手に取るようにわかります。これはもちろん春野百合子だからこそなせる技ですが、同時に浪曲という芸能のもつ力でもあると思います。啖呵(セリフ)と節(歌)、そして三味線による音楽的効果が、人の心をぐっと惹き付けるんです。

大阪は、文楽や歌舞伎など、さまざまな芸能が生まれ育ったところ。芸を追求する者にとって、そうした土壌に足をつけて日々生活しているというだけで、何か得るものがあるように思います。師匠と同じ空気を吸うだけで何かを吸収できるんじゃないかと。最近では文楽の方との交流もあり、義太夫の語りや三味線との合わせ方などは勉強になりますね。そうした大阪の空気は、私の肌にとっても合っています。そして何より嬉しいのは、いろいろ教えてもらったり、激励のお手紙をいただいたり、心から私たちを育てようという気持ちで応援してくださっているお客様の存在です。私はいつも、この方たちを絶対裏切れないと思っています。



春野恵子 (はるの けいこ) 氏

1997年、東京大学教育学部卒。出版社勤務を経て、99年に役者を目指し芸能事務所に所属。2000年、TV「進め!電波少年」のケイコ先生役で一躍人気者に。03年、浪曲師春野百合子に弟子入り。06年3月「堺浪曲新風亭」で初舞台。同年6月、大阪市天王寺区の「一心寺門前浪曲寄席」で本格デビューを果たす。

大川・八軒家浜棧橋
(大阪市中央区)にて

ファンがファンを生む

現在、大阪では20人ほどの浪曲師が活躍していますが、春野百合子や京山小圓嬢といった師匠方と、私たち若手の年齢差が数十年ととても大きいのが現状です。三味線にしても藤信初子師匠は90歳代、岡本貞子師匠は70歳代と高齢です。だから若手が頑張って浪曲を伝えていかなくてはという気持がとても強いですね。そこで昨年1月、京山幸枝若師匠の「若手同士で切磋琢磨したほうがいい」という勧めで、30歳代の若手浪曲師による「新星浪曲☆新宣組」を結成しました。さらに10月には東京の若手浪曲師・玉川奈々福さんの声かけで「浪曲乙女組!」を結成し、浪曲の東西交流を行っています。

若手ユニットでカフェやクラブで浪曲をする機会が増えると、今まで浪曲を知らなかった若いお客様や、もう一度浪曲を聞いてみようという年輩のお客様が戻ってこられました。そうした新たな浪曲ファンは、この面白さをどうにかして伝えようと、ひとりひとりが宣伝部長よろしくインターネットや口コミで広めていただき、とてもありがたいと思っています。

現代は、女性が生きて行くうえでとても多くの選択肢があります。だから悩みも多い。どんな生き方が幸せなのか、何を選んで何を捨てるべきか。私は女性の浪曲師として、さまざまな女性の生き方や考え方を描き出すことで、現代の女性にエールを送り、幸せな生き方のヒントを見つけてもらえればと思っています。